稚アユの放流・・・・・再考。

天神川産の親魚を使って生産した稚アユ 20 万尾を、4 月 6 日と 29 日の 2 回に分けて放流しました。昨年と比べて冬季の積雪が多かったため、最上流の放流地点の水温が 4 月 6 日は 11℃、29 日でも 11.5℃と低く、放流条件としてはやや厳しい状況でした。しかし天気は両日とも気持ちよい快晴で、予定通り作業を終えることができました。

竹田川方面では述べ 7 カ所、小鴨川方面ではのべ 8 カ所に放流を行いましたが、放流作業に同行した印象としては、「もっと楽に！もっとアユに優しい放流を！」と感じました。

多くの場合、稚アユは生産場からトラックで運ばれてくるわけですが、天神川に限らず川そばにトラックが横付けできる場所は少なく、どこの河川でも必然的に土手の上や高い橋の上から放流することになります。時には数メートル上から空中散布といったケースも見受けられます。また、バケツリレーで放流する場合もありますが、この方法も必ずしも良いとは限りません。トラック上の狭い水槽から玉網を掻き回してすくい取る作業は、物理的な衝撃に弱い稚アユたちにとっては致命傷になる場合もあります。幸いにも今回放流されたアユたちは順調に遡上していきましたが、稚アユ達の身になれば、「もう少し優しく扱ってくれよ」というのが本音でしょう。

図 4　放流されたアユ。心境やいかに・・・

より良い放流を目指して！

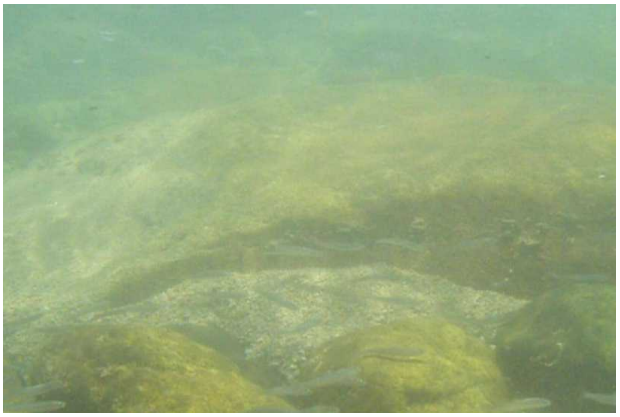

図 5　放流後、上流を目指して遊泳する稚アユ

なぜそのような場所と方法で放流をしなくてはならないのか今一度考えてみると、その理由の多くは、これまで放流してきた種苗の特性によるものだと思われます。

例えば、稚アユが放流される場所は良い石が入っている区域で、またその下流部には大きな淵が控えているところが選ばれているように思います。これは、放流後の稚アユが居着いて成長できることと、降雨で増水して下流に流されても淵で留まらせるための配慮と伺えます。ところが今年放流した稚アユは、下流に下るどころかその場にも居着かず、どんどん上流に遡上していく様子が観察されています。しかしこれは天然の稚アユでは当たり前の行動です。裏を返せば、今回放流した稚アユは天然の性質を失っていないといえます。天然魚を親にした稚アユを全国に先駆けて生産してきた山形県の担当者は、「物理的に遡上を阻害する構造物（ダム、堰堤など）が無ければ、放流場所は最下流部で良い」と断言しています。天然の稚アユは、早期に遡上した大きい個体が下流側から条件の良い場所に居付き、後から来た個体がそれを追い越しながら順々に上流側に居場所を作っていくといわれています。このことから考えると、放流作業のしにくい場所を選んで稚アユにダメージを与えるより、堰堤のすぐ上や大きな淵に放流してやれば、稚アユ自らが適した時期に条件の良い場所を選択しながら上流部に生息場所を広げていくと思われます。